

序

2011年の東日本大震災、2015年の常総水害、2016年の熊本地震を経験し、わたしたちはわが国が災害列島であることを改めて認識しました。将来起こることが予測されている南海トラフ地震あるいは南海東南海連動型地震では、大きな被害が予測されています。その甚大な被害想定には言葉を失いますが、だからこそそれぞれの地域で、災害による被害を最小化するように備えをしておくことが重要だと思います。

大災害においては、病院は傷病者の治療の中心施設として機能することが求められ、病院の被災による影響は最小限であることを前提に訓練等が行われています。しかしながら、過去の経験からは、災害中心部に立地する病院では医療需要が急増すると同時に病院設備が損傷し、医療供給機能が著しく低下することが示されています。病院建物の耐震化は災害拠点病院を中心に進んでいますが、耐震化のみで災害時における病院機能を維持できるわけではありません。耐震建築とは、「大きな地震に襲われたときに建物が倒壊しない」という意味であり、壁や天井などの建物の内装が損傷しないということではないのです。病院で診療業務を継続するためには、水、電気、ガス、通信などのインフラストラクチャの維持が重要です。たとえ耐震建築であっても、広域でインフラストラクチャが機能低下を起こせば、病院機能を維持することは困難になります。

従来、災害によって病院が機能を維持できなくなり、患者を避難させることは想定されておらず、このような事例が語られることは少なかったと思います。しかしながら、東日本大震災では津波に襲われた病院で多くの患者さんと職員が犠牲になり、被災患者の救援が完了するまで長い時間を要しました。2016年4月の熊本地震では多くの病院が被災して、病院から患者を移動させる必要がありました。実際には過去にもこのような経験をしている病院があり、その経験を語り継ぐことが重要であると考えて、災害医療フォーラムを2015年、2016年の2回にわたって開催させていただき、実際の被災・避難の体験を語っていただきました。

演者の先生方のなかには、胸が潰れるようなつらい思い出を語ってくださった方もおられました。しかしながら、大変な思いをしながらも、地域住民のために被災後も医療を継続し、復興として、みなさま、医療再生の新たなスタートを切っておられます。本当に頭が下がる思いであるとともに、医療人の素晴らしさに改めて感動する思いです。

本書を通じて、災害時の病院の体験を共有し、次の災害に備えることの一助になれば幸いです。

本書をまとめるにあたり、弘前大学大学院医学研究科胸部心臓血管外科学講座秘書の佐川美保子さん、大崎恵理子さんに講演からの原稿起こしで多大な協力をいただきましたことに心から感謝申し上げます。災害医療フォーラムは、内閣府特別研究「被災者のヘルスリテラシー向

上を目的とした地域の医療防災ネットワークの構築―避難所・病院・自治体・薬局をつなぐ新たな試み―」（主任研究者・摂南大学工学部建築学科 池内淳子教授）の補助金で開催させていただきました。開催にあたり、池内研究室の大学院生のみなさんにお手伝いをいただきましたことに感謝申し上げます。講演集を発行するにあたり、快くお引き受けいただいた医薬ジャーナル社の辻子健司社長，編集・校正を担当してくださいました市原達矢さまに感謝申し上げます。

2017年8月

弘前大学大学院医学研究科胸部心臓血管外科教授
福田 幾夫